

共生願い絵本再び

全盲の藤井さん、英語版刊行

県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」(相模原市緑区)で入所者19人が犠牲となった事件から26日で4年。事件の裁判が終わり、死刑判決が確定してから初めて迎える「鎮魂の日」に、全盲でNPO法人日本障害者協議会(JD)代表の藤井克徳さん(71)が5年前に手掛けた絵本「えほん障害者権利条約」(汐文社)の英語版を刊行する。「19人の思いを背負い、二度と事件を繰り返させない」との決意を込める。

障害者の差別禁止や社会参加を促す権利条約は2006年12月に国連総会で採択され、日本も14年に締結。そんな条約の意義を子どもたちに分かりやすく伝えようと、15年5月に日本語版を刊行した。全国の小中学校の図書館などに配架され、その数は2万部を超えるという。

(石川 泰大)

権利条約を擬人化した「イエローボン君」が、条約を根付かせながら世界を旅して日本にたどり着くまでを描いた物語。藤井さんが文と構成を練り、そのイメージを版画家の里圭さん(43)がぬくもり

障害者権利条約 意義伝え

ある版画で表現した。英語版と同じ示す北極星でもあるのも同様だ。

「権利条約は今の社会へのイエローカードであり、「こんな社会をめざしましょう」

やまゆり園 事件4年

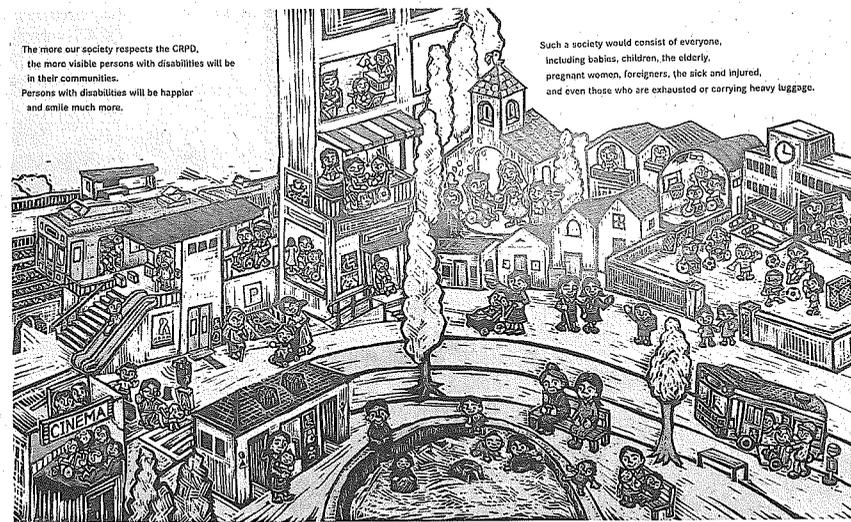
絵本の冒頭には日本語版を踏襲し、そつづつた。「社会には植松聖死刑囚の言動を肯定する『小さな植松』が少なからず存在する。だからこそ、権利条約の重要性はさらに増している」と藤井さん。新型コロナウイルスの感染拡大や少子高齢化対策として

「命の選別」が声高に叫ばれる現状に強い危機感を募らせる。

お気に入りの場面がある。車イスで働く女性や盲導犬に引かれて横断歩道を渡る男性

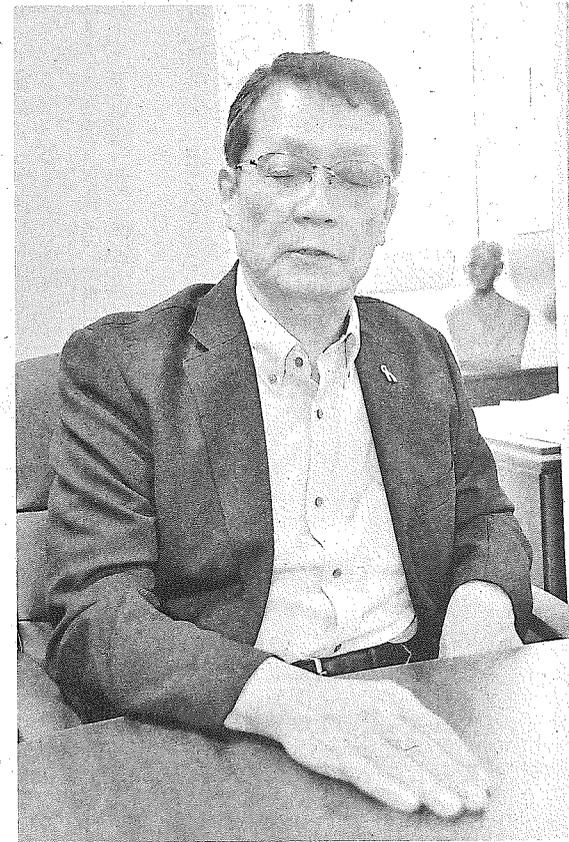
。障害者と健常者が地域で共に暮らす様子が見開きで描かれている。「障害のある人が住みやすい社会は誰もが住みやすい社会」。それが、藤

井さんのお気に入りのページ。障害者と健常者が共に街で暮らす様子が描かれている。「やまゆり園事件が問うているのは社会の寛容性だ」と語る藤井さん(東京都中野区)



The more our society respects the CRPD, the more visible persons with disabilities will be in their communities. Persons with disabilities will be happier and smile much more.

Such a society would consist of everyone, including babies, children, the elderly, pregnant women, foreigners, the sick and injured, and even those who are exhausted or carrying heavy luggage.



藤井さんのお気に入りのページ。障害者と健常者が共に街で暮らす様子が描かれている。「やまゆり園事件が問うているのは社会の寛容性だ」と語る藤井さん(東京都中野区)

井さんの目指す「未来予想図」だ。

「変わらねば、あの日の前と後とは、行く手照らせし19のトーチ」

あの日から4年。藤井さんは事件直後に作った短歌を思い返すたび、苦い思いが込み上げるという。社会に根付く障害者への差別や偏見をなくすことはできたのか。共生社会の実現に近づけたのか。答えはいずれも「ノー」。なぜ事件が起きたのか、責任能力の有無のみを争った裁判で明らかにならなかった背景要因の解明が必要と考えている。

藤井さんは言う。「僕たちにできることは亡くなった19人の思いを背負い、事件を二度と繰り返させないこと」。その一歩として、この絵本を通じ、子どもと親が障害について話さずにはいられぬように願う。

英語版絵本は税別18800円。問い合わせは、汐文社03(68662)52000。

三者から見えないタイプレック 容疑者とのやりとりをスク